

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

近 藤 正 則

一 緒 言

晦庵先生朱文公集（朱子文集）卷七十三所收の雜著『讀余隱之尊孟辯』は、司馬光（疑孟十條、史刻一條）李觀（常語十七條）鄭厚（藝圃折衷十條）の孟子批判と各條ごとの余隱之の尊孟辯を採録し、それぞれ議論に對して朱子が論評を附け加えたものである。但し、今日傳えられる『尊孟辯』という書物には書誌學的な問題も少なくなく、余隱之という人物も傳不詳で「隱之、名允文。建安人」という朱子の標注の外にその履歷を明らかにすることはできない。

ここで扱う朱子文集採録の孟子批判は、ただちに宋代の誹孟運動の全體を總括するものとは斷じえないが、少なくとも余隱之の孟子辯護とあわせ見ること、宋代の誹孟・尊孟兩派の論争點の一端を窺うるものと思われる。また、個々の議論に對する朱子の論評は孟子七篇が諸子から經書へと昇格する經緯を考える上での參考となるほか、朱子独自の尊孟の立場を明らかにするものと思われる。

二 批判の概要と隱之の孟子辯護の特徴

司馬光・李觀・鄭厚（以下、誹孟派三者とも稱す）の孟子批判の論調

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

は、微妙に趣を異にする點が認められるが、主として名分論の立場から孟子の言行を問題視し、いわゆる孔孟之道の實在を疑うという點で共通したものとなっている。個々の批判文はいわば孟子七篇の非を箇條書的に列擧するものが大半で、論理的なまとまりを期待することは難しいのであるが、叙述の内容の面から大略次の三つの類型に整理することができる。

(A) 孟子思想の内容的方面から七篇中の具體的言行が孔子の意に叛くものであることを指摘し、孟子が孔子之道に對して名實相反の罪を犯していると誹るもの。この類型に屬する批判の具體的事例は多方面にわたっているが、殊に重點的に扱われているのは、出處進退における禮貌至上主義及び孟子不尊周勸諸侯爲天子の問題である。孟子の出處進退の尊大さは時の庸君定・哀に對する聖人孔子の臣節との比較において論ぜられるもので、孟子が周王室を蔑して諸侯に天子となることを説き、戰國亂世の下剋上に根據を與えたとする非難とともに、君臣之義を基軸としたものとなっているのが特徴である。

(B) 七篇の叙述表現の問題として、孟子の言説・論調の辛辣さを過激狹小とし、辯論術的詭辯性とその主張の非現實性を難ずるも

の。これは主に告子との性に關する論争を性有三品の立場から論駁するものや、陳仲子の小節に對する過剰な攻撃、滕文公に自説を主張する際の功利主義的傾向などを難するもので、孟子の論法・叙述それ自体を問題とするのが特徴である。

(C) 考證的な立場から七篇所載の歴史的記事文の史實性を疑うもの。これは主に七篇所載の帝舜説話の信憑性と「以德行仁者王、王不待大、湯以七十里、文王以百里」(公上3)に代表される湯・文の故事の眞實性が中心的テーマとなっており、孟子は詩・書に長じていたという司馬遷以來の評價を念頭に置いたものと見るこ
とができる。

全般的傾向として、(B)(C)は七篇の記事文の叙述そのものを直接取り扱う點で共通しているが、(A)は常に孔子という窓越しに孟子の言行や思想を吟味するもので、批判する側の視點ということからすれば、(A)と(B)(C)との間には質的な相違があると考えられる。『讀余隱之尊孟辯』に採録された孟子批判は、別表に見るように、數の上からも(A)に屬するものが中核をなしていると思われるが、とりわけ君臣之義を基軸とした孟子不尊周勸諸侯爲天子の問題は、程・朱以前にあつては仁義・王道を以て七篇貫通の主題と見る風潮が認められることからして、孟

子思想の根本にかかわるものと言えよう。

孟子の王道論における不尊周勸諸侯爲天子・君臣關係・革命是認等の問題は、ここで扱う司馬光・李觀・鄭厚の三者に限らず、常に誹孟の中心的テーマとして引き合いにされているのであるが、これらの問題に如何に對應するかということは尊孟の側にとつても避く可からざることと言わねばならない。まずそこで、孟子不尊周勸諸侯爲天子の問題を中心に(A)に屬する批判を見ていくと、誹孟派三者に共通した孟子批判の論理とでもいふべき特徴が歸納される。その第一點は、前述のように孔子という窓越しに孟子の言行を吟味するということである。孔子の言行を絶對的な尺度として、六經及び論語に依據しながら孟子の言行が孔子之道に相反矛盾するものであると極めつける方法は、儒家思想の枠組みの中では頗る常套的手段というべきであるが、「述仲尼之意、作孟子七篇」(史記孟軻列傳)という定見を覆すには効果的かつ必須のものと思われる。儒家思想にあつては、孔子の言行は全てに對する規範と見做すことができるが、ここでの場合の孔子之道とは、春秋之筆法に託された尊周と君臣之義を正すことに集約しうる。

大哉、孔子作春秋也。援周室於千仞之壑、使天下昭然知無二王。

別表

孟子批判の要點		該當箇條		主な批判對象章句	
(A)	孟子の出處進退における禮貌至上主義と尊大な姿勢	疑上3 疑下3	折衷1 折衷9	公下22 萬下5	告下14 公下11
○	齊の伐燕を默認肯定することの不仁	疑上4 折衷1	折衷4	梁下10 梁下11	公下8 公下9
○	孟子の言説は君臣之義を蔑し下剋上を正當化するもの	疑下2 常上1 常下6	折衷4	萬下9 公上1	公下8

○	○	(B)	(C)	(その他)	
仁義・王道の説は不尊周勸諸侯爲天子であり、孔子之道に叛くもの	常上2 常下9	常上5 常下10	常上6 常下2	告下17 公上1 梁下5 公下8	
孟子が否定する桓公・管仲及び五霸こそ尊王の功臣	疑下4 常上4	常上3 常下7	折衷1 折衷7	梁下7 公上1 公上3	
湯・武放伐論の吹聴と革命は認は肯首しがたい	常上4	常下7	折衷1	梁下8 離下20	
父子間不責善は不慈不孝のすすめである	疑上5			離上18	
伯夷・柳下惠への孟子の評価は孔子と相反する	疑上1	常下1		公上2 公上9	
盡信書則不如無書の發言は孔子不信の語	常下1	常下6 折衷3		盡下3	
行仁義而得天下の説の功利主義と現實性の缺如	疑上2	疑下10		梁下14 滕下10	
陳仲子の小節に對する過激狹小な攻撃	疑上2	疑下1	折衷5 折衷6	告上3 滕下8 萬下4	
異端排撃に關する偏執と狹小	疑下1	疑上6 疑下1		告上2 告上3	
孟子の過剰な辨術と場當りの議論	疑上6 疑下1	疑下5 疑下6(史刻) 常下2		盡上7 萬上35 公上2 萬上5 離下20 萬上6	
性に關する告子との論争の詭辨性	疑上6 疑下1	疑下5 疑下6(史刻) 常下2		盡上13	
七篇所載の帝舜説話及び湯・文の故事の史實性	疑下5 常下3	疑下6(史刻) 常下7			
孟子の言う王者とは實質的に覇者を意味する	折衷7				
聖人文武並用のゆえに孟子七篇を退け孫子十三篇を貴とせよ	折衷8				

(A)の○印は不尊周に關連した批判である。右別表及び本文引用語句のうち『讀余隱之尊孟辨』からのものは、該當箇條を次のように略記した。なお、疑孟・常語は上下に分けて部立てされている。

疑孟上第一條→疑上1 常語下第一條への隱之の孟子辯護→常下1辨 折衷第一條の議論に對する朱子の論評→折衷1朱

主な批判對象章句は、批判文に引用されたものに限り引用順に重複を避けて配列した。また、孟子思想の全體を踏まえたものや複数の章句にわたる孟子の言説を要約して批判するものは敢えて記入しなかった。別表の主な批判對象章句については、孟子集注の朱子の章句分けにより該當章句を次のように略記した。

梁惠王章句上第一章→梁上1 公孫丑章句下第二章→公下2

『讀余隱之尊孟辨』に見える朱子の孟子不尊周への對應

…微孔子則春秋不作、微春秋則京師不尊。爲人臣、不當如是哉。
(常上6)

という李觀の認識は他の二者にも共通するもので、孔子之道は即ち君臣之義を正し衰周を救うことであるという固定的な觀念の演繹によって孟子の言行を検討し、「名學孔子、而實儒之者」(常上1)としての孟子の罪狀を列擧するのである。王道論に並ぶ七篇の主題と目される仁義説も、ここでは天下篡奪の具であり「孫吳之智、蘇張之詐、孟子之仁義、其原不同、其所以亂天下、一也」(同上)と糾彈される。第二點は、春秋戰國時代に關する歴史的認識の問題である。孟子の時代における周王朝の存在について、最もまとまった見解を述べているのも李觀であるが、その内容は「孟子嘗周顯王時。其後尙且百年、而秦并之」(常上2)「夫周顯王未聞有惡行、特微弱爾」(常上5)という二項に要約される。李觀によれば、孟子の時代に周室の力が衰えていたのは盛衰循環の原理によるのであり「聖王之後、不能無昏亂」(常下8)という當然の結果に他ならず、天が王朝を廢するのには必ず桀・紂の如き暴君が出現した時に限られており、この點で孟子の時代に周室廢絶の要素は何一つ認められない、衰微なればこそ却って周室を守り立てるのが道であり、たた單に微弱ということだけで周王朝を蔑し諸侯に天子となることを説くのは道義に悖ること甚しい、ということになる。⁽³⁾李觀のみならず、誹孟派の認識では、孔・孟の時代の差は周室の衰微の程度の差に他ならず、能く周室を援けて天下に道を闡明する者があれば、王朝の中興も可能な歴史的情況にかわりなかつた譯で、孔子之道を看板に掲げてその實は時勢に阿り、我身一身の利祿を求めて道を曲げ、天下積亂のもとを作った孟子の言行は、似而非の最たる者に他ならない。前述のように、「孔子之道、君君臣臣也。孟子之道、人

皆可以爲君也」(常上1)という前提から、孟子の主張のメインテーマである「仁義」すらも戰國諸子の權謀術數と同列の天下壞亂の元凶であり、篡奪の器に他ならないという判斷が導かれるのであるが、公孫丑下第八章で、孟子が沈同に約蕪以王制を説く事實よりすれば、孟子は周王朝の存在を熟知した上で、諸侯に天子となる道を遊説し革命と下剋上を節度なく吹聴してまわったことになり、これは子が病父を見殺しするような殘忍な行爲であり、口舌を以て利祿を求める賊心によるものである、とするのが誹孟派の主張のあらましである。このような見解のもとで、司馬光は各論的に孟子の言行が孔子の意思に叛くことを指摘し、李觀は韓愈の「原道」に反駁して「孔子死、不得其傳矣」(常上1)と言うべきだと主張しているが、鄭厚に至ってはいわゆる孔孟之道を否定するあまり「從漢儒曰孔墨」(折衷2)とさえ斷している。

誹孟派三者が孔子之道に叛くものとして擧げる孟子の言行は、別表に見るように多方面にわたり、前聖未發の所と稱される内面的な問題の外は、七篇の主要な主張が批判の對象とされていることが分かる。そして多くの場合、既に述べたような固定的な觀念としての孔子之道との比較によってその非を論ずるのであるが、固定的觀念に拘泥する限り、批判者の視野には歴史的情況の批判を踏まえた客觀性が缺如せざるをえないのは否定できない。また、孔子の言行を唯一絶對の尺度として用いながら、時として聖人の上に天子を戴くような意識が窺われるのも事實で、「孟軻非周民乎。履周之地、食周之粟、常有無周之心。學仲尼而叛之者也」(折衷2)「軻誦仁義、賣仁義者也。安得爲仲尼之徒歟。嗟夫、孔子生而周尊、孟軻生而周絶」(同上)といった鄭厚語は、後述する陽貨篇公山弗擾章の解釋ともども誹孟を孔子に言寄

せるあまりの逸脱感を拭い去れない。誹孟派三者の中で最も論調穩便な司馬光が、孟子の出處進退に關する言行と公孫丑下第二章に見える齊王への對應とにかかわって「後之人、挾其有以驕其君、無所事而貪祿位者、皆援孟子自況」(疑上3)と難じ、萬章下第九章の「同姓之卿、君有大過則諫、反覆之而不聽則易位」を「使後世有貴戚之臣、諫其君而不聽、遂廢之而代之曰、吾用孟子之言也、非篡也、義也、其可乎。……孟子之言、不足以格驕君之非、而適足以爲篡亂之資也」(疑下2)と批判しているのも、彼の政治的立場の投影と見る事ができるのである。⁽⁵⁾

次に余隱之の孟子辯護の方法であるが、最も顯著なことは孔子を楯にした批判に對して孔子の言行による孟子の正當化を行う傾向を有する點である。殊に(A)に屬する批判への反論は、孔孟一致の前提のもとて、飽くまでも孟子の言行の眞意は孔子の本意に沿つたものという觀點からなされており、誹孟派三者と據り立つ所を同じくし、正反對の結論を指せうとするのが余隱之の孟子辯護の基本姿勢であると言へる。例えば、隱之は出處進退の問題に對して「(孟子)未嘗或戾於吾孔子之所行」(疑下3辯)という結論を導くために、萬章上第八章の「孔子進以禮、退以義。得之不得、曰有命」を證左として進退に禮貌の有無を第一義とするのは孔孟一致であると論じている。⁽⁶⁾また、公孫丑下第二章(孟子將朝王章)での齊宣王に對する孟子の態度について、司馬光が「孔子聖人也。定・哀庸君也。然定・哀召孔子、孔子不俟駕而行。過位、色勃如也、足躍如也。過虛位、且不敢不恭、況召之有不往而他適乎」(疑上3)と述べ、更に周公の幼君成王に對する故事を引き合ひにして孟子の行爲を詰るのに對して、隱之は禮記學記篇の一節

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

「君之所不臣於其臣者二、而師處其一。尊師之禮、詔於天子無北面」を引用し齊宣王への孟子の對應こそ孔子の教えを體現するものだと反論している。他にも梁惠王下第五章で齊宣王に「夫明堂者、王者之堂也。王欲行王政、則勿毀之矣」と説く孟子の語は天下を虎視するものだという李觀の指摘(常下9)には、八佾篇で孔子が告朔之餼羊を去らなかつたのと同じ心であると反論し、孟子の齊での去就を市井販婦の魚鹽果菜を行躡する姿にたとえ、三宿出晝の濡滞を詰る鄭厚(折衷19)には、孔子も「沽之哉、沽之哉。我待賈者也」(子罕篇第十二章)と言ひ、孟子同然により高く我身を售らんとしており、三宿出晝のことも孔子去魯の濡滞と同じ心だと説くなど、大略(A)に屬する批判の全體に孔孟一致の原則をあてていふと言つてよい。誹孟派の孔子之道即春秋之筆法という前提に對しても、余隱之は孟子之言即春秋之遺意という觀點から對抗し同様の思辯の型を示している。例えば、孔子は春秋の中で君臣之義を正しながら社稷の墟となるのを防ぐための變を是認していると斷して、司馬光が下剋上に根據を與えるとして痛罵した「同姓之卿、君有大過則諫、反覆之而不聽則易位」の語こそ春秋之筆法を踏襲したものだと規定しているのはその典型である。

このように(A)に屬する批判に對する余隱之の孟子辯護は、飽くまでも孔孟一致の原則を貫くことで孟子思想の正統性を引き出そうとするものと規定しうが、誹孟の最も根本的かつ重點的テーマである孟子不尊周勸諸侯爲天子の問題には、なお一層この基本姿勢を堅持していると言つてよい。春秋戰國時代の周室に對する隱之の認識は「自平王以東、周德不競、爲天子者、雖無驕侈殘暴之事、然不能振皇綱、擁虛位而已」(折衷2辯)というもので、孟子の時周室猶存す、という點では、李觀らとはほ共通した見方といつてよい。ただ隱之が導く結論

は、誹孟派と正反對に、孔子の時代にして既に王事を達する力量を喪失し、孔子も見切りをつけた衰周を百餘年後の孟子に救える筈がないというものである。

王者之迹熄、而詩亡。詩亡、然後春秋作。則知王者之賞罰不行乎天下、而自列於侯邦也。周之衰微、久矣。(常上5辯)

春秋之時、周室衰微、天王不能自立、以至下堂而見諸侯。當是時、徒擁其虛位爾。孟子距孔子之時、又百有餘歲、則周之微弱、可知矣。(常上6辯)

右は隱之の時代認識を要約する部分であるが、孔子作春秋の意圖を衰周救済にありとする誹孟派に對して、天下に義主なきがためと規定するものが隱之の立場である。「孔子歷聘七十二君、未嘗一言說其君率諸侯而尊周。以力假仁霸者事、孔子不肯爲也。而所以作春秋者、爲天下之無主也」(折衷2辯)という隱之の主張は論語を踏まえたものと思われるが、孔子すら已に久しく天子たる實質を失つた周室を尊べと説いていないのであるから、孟子が尊周を説かないのは道理であるという論理に展開し、不尊周もまた孔孟一致の所爲という結論に歸着するのである。余隱之によれば、春秋之筆法に明示されている孔子の尊王思想とは、人之大倫としての君臣之義を闡明し、天下之名分を正して王制あることを知らしめるということ、現下の衰周に拘泥した狭い意味ではない、七十二君に對して尊衰周を徒らに説けば、逆に周室の滅亡を促す結果になることを熟知していたので、七十二君に對して直接に尊周を説かなかつた、ということになる。

このような余隱之の孔子不說尊周の主張は、論語の解釋をめぐる議論の中により具體的に見ることが出来る。その一は、陽貨篇公山弗擾章の孔子の語「如用我者、吾其爲東周乎」である。鄭厚が「春秋書

王、存周也。如用我者、吾其爲東周乎。此仲尼之本心也」(折衷2)と述べ、下文に東周が時の周室のことであり、靈王を佐命せんとするものが孔子の本意であるとする見解を示しているのに對して、隱之は平が疑詞であるから「吾ハ其レ東周ヲオサメンヤ」と訓むべきで、孔子が王朝としての實質を失つた周に見切りをつけたものと反論し、孔子は新王朝の出現を期待していたに違いないと斷言している。この議論に對して、朱子は後世の歴史家の如く、孔子が西周に對する東周という語を用いたかどうか疑問を残し、東周を文・武・周公以來の周の道を東方に興す意と解して「謂欲說弗擾以王道、則非孔子之心也。降秦離作春秋、不知果有繼周之意否。」と述べ、孔子が具體的に新王朝の出現を期待していたという隱之の意見を退けている。その二は、憲問篇桓公殺公子糾章の孔子の語「桓公九合諸侯不以兵車、管仲之力也。如其仁、如其仁」の訓詁と、管仲及び五霸の評價に關するもので、

「五霸率諸侯事天子、孟子勸諸侯爲天子。苟有人性者、必知其逆順耳矣」(常上2)という觀點に立つ李靚が「如其仁」を管仲の功績を無條件に賞した語と見做すのに對して、隱之は「其ノ仁ニシカンヤ」ではなく「其レ仁ヲイカンセン」と訓むべきで、孔子は管仲の功烈を無視していないが、仁と稱するには値しないと評しているのだ、と反論している。管仲及び五霸の所業は、孟子によってほぼ全面的に否定されるが、誹孟派は孔子之道に春秋之筆法に尊周という圖式から、敢えてほぼ絶賛に近い評價を與えている。例えば、司馬光は五霸と堯・舜・湯・武の相違は仁義の大小高下遠近多寡の問題に過ぎない(疑下4)と斷し、鄭厚は「仲尼之徒、無道桓文之事者」としてその功業を無視したことを孟子の罪の第一にあげている(折衷1)。李靚が「桓公・管仲之於周、救父祖也」(常上3)「使齊桓有終、管仲能不侈、則文王・太

公何思哉」(常上7)と述べ、深く君臣之禮を知る齊桓の美德を、孔子が春秋を作った業績に比肩させている(常上6)のに對して、隱之が「孔子謂管仲如其仁、言仲之似仁而非仁也」(常上3辯)と反論するのは、孟子の五霸否定の線上で孔子の立場を説明したものと云いうる。

この他にも、例えば微子篇首章の「孔子曰、殷有三仁焉」をめぐる自説補強の我田引水の議論が行われているが、これも誹孟派が自説を孔子に假託しているのと同次元で、隱之は孔子の言行を孟子に引き寄せ、孟子の言説を孔子に語らせるような方法を講じ、誹孟派同様ともいべき孔子による孟子思想の正當化を果している。

以上のように、余隱之の孟子辯護の方法は、原理的には誹孟派三者の論理展開と同質であり、結論の方向が正反對になっているものと見てよい。

速戰國時、周室衰微、抑又甚矣。孟子則學孔子者也。詎肯效管仲假仁而圖霸。(折衷2辯)

若管仲之功可爲、孔子爲之矣。孔子不爲、孟子安得爲之乎。(常上6辯)

仲尼生靈王之時、猶不去魯而事周。至于顯王、則又微弱矣。孟子安得去齊而事周乎。(常上5辯)

孟子不尊周に對する余隱之の意見を整理すると、右の三條にその結論を要約することができる。この線上において、隱之は孟子の勸諸侯爲天子の言行を、自説の孔子不説尊周の二面性をあてて解釋し、これも孔孟一致の通變之道であると規定している。孟子は沈同に約燕以王制を説き文・武・周公以來の王制を重視している、従つて諸侯に湯・武となれと説いたのも王制あることを知らしめるのが本意であり天下を取れという意味ではない、孟子の目的は飽くまで民の慘狀を救うこと

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

にあり「行仁義而得天下」は伊尹・太公・孔子の説く所に他ならない、¹⁰² といふのがその概略である。隱之によれば、孟子は湯・武を引き合いにして仁義を行えと説いたのであり、湯・武のように天下を取れとは説いていないといふことになるのである。¹⁰³ 孟子の不尊周は、孔子が現下の衰周に王事を期待せず、諸侯に尊周を説かなかつた所に依據するものであり、勸諸侯爲天子の言説は、王制あるを知らしめ世に道を顯現させるための時勢に應じた方法であつて、正に春秋之旨を得たものである、と隱之の主張をまとめることができる。

三 朱子の孟子不尊周への對應

『讀余隱之尊孟辯』に記された朱子の論評が、尊孟を基本的立場とすることは言う迄もない。朱子もまた儒家の一員として絶對的存在としての孔子を避けえない枠組みの中で物を言うのであり、この點では隱之と類似した基盤に立つと見てよいであらう。事實、朱子もまた君子の進退・孟子の教育觀など批判の(A)に屬する事柄については、孔子の事例による孟子の適切さを説き、孔孟相傳の道を飽くまで正統とし述而不作の原則を大切にする姿勢を隨所に見せている。但し、朱子の場合にはそれにも一定の節度があつて、無暗に孔子に言寄せれば事足りるものではないことは、君子之仕に關する議論に七篇中の孔子の語を引用して證左とする隱之を「隱之所辯、引孔子事爲證、恐未然也」(疑下3朱)と批判していることから分明である。これは孟子辯護のために孟子の説く孔子像を引き合いにすることの客觀性の缺落を指摘したものである。また、折衷第一條の辯で隱之が孟子の處した時代の情況を説明して趙岐の『孟子題辭』を引用しているのに對して、「此段辯孟軻非賢人之句、亦須引孟子所傳之說。今只以趙氏題辭爲據、恐

未足以折談者之鋒也」と批判しているのは、七篇を以て七篇を解義すべきことを主張するもので、朱子の客觀主義をよく示したものと云える。誹孟派への朱子の對應は、概して七篇記載の事實に基づいて孟子の言行の意義を明らかにするといった方針が貫かれており、飽くまで批判に對する辯護というよりも、むしろ朱子自身の孟子説の一斑あるいは經文解釋の方法の表明といった傾向を示している。

殊に、孟子不尊周勸諸侯爲天子の問題についての朱子の對應を跡づけていくと、朱子は余隱之一線を畫した説明を行い、誹孟の原點に對峙し、固定的な儒教倫理に拘泥し進二無二孟子を否定しようとする誹孟派と、飽くまで孔孟一致に固執し時には牽強附會も辭さぬ余隱之との水掛け論的次元から脱脚していることが分かるのである。朱子の孟子不尊周に對する見解の第一の特徴は、孔子尊周・孟子不尊周の相違を歴史的事實として認めることである。

孔子尊周、孟子不尊周、如多裘夏葛饑食渴飲、時措之宜異爾。

孔・孟易地則皆然。李氏未之思也。隱之以孟子之故、必謂孔子不尊周。又似諸公以孔子之故、必謂孟子不合不尊周也。得時措之宜、則並行而不相悖矣。(常上6朱)

第二點は歷代聖賢に一貫する相傳之一道を想定し、個々の相異なる言行の根源は同一であると規定することである。

雖窮天地亘萬世、而其心之所同然、若合節符。由是而出、宰制萬物、酬酢萬變、莫非此心之妙用。而其時措之宜、又不必同也。故堯・舜與賢、禹與子、湯放桀、文王事殷、武王殺受、孔子作春秋以翼衰周、孟子說諸侯以行王道、皆未嘗同也。又何害其相傳之一道。而孟子之所謂仁義者、亦不過使天下之人、各得本心之所同然者耳。

(常上1朱)

右の二點を要約すると、朱子の論理構成かはは「理一分殊」の主張など近似した形を持つていことが分かる。所同然之心・相傳之一道は個々の事象を超えた所の普遍的眞理であり、歴史の流れを超えて存在する根本原理(大體)と読み換えることができる。朱子によれば、普遍的眞理を體得した歷代の聖賢はその妙用により萬物萬變を宰制酬酢し、個々の置かれた時代情況の中で歴史的必然性に立脚した正義(時措之宜)としての具體的行爲を履み行うのであって、相傳之一道が普遍なればこそ各時代の歴史的必然性(理勢之必然)に應じた個々別様の道の實現の方途が行われる、ということになるのである。引用文中の「孔・孟易地則皆然」という語は離婁下第二十九・三十一章の孟子の語「禹・稷・顔子易地則皆然」「曾子・子思易地則皆然」を應用したもので、時措之宜という歴史批判を要件として孟子の言行を孟子の語によって説明したものと見ることができる。朱子は「李氏罪孟子勸諸侯爲天子、正爲不知時措之宜。隱之之辯已得之、但少發明時措之意」(常上2朱)「隱之只以衰微二字、斷周之不可事、正在李氏詆罵中」(常上5朱)と述へ、誹孟派の基本的過誤として固定的儒教論理に膠着して歴史的背景(事實)と時措之宜への考慮を缺く點を指摘するとともに隱之の孟子辯護の方法をも批判している。「孔子之道、君君臣臣也」という命題のもとで、文王の事殷を至上とし湯・武の放伐を次善の策と見做す誹孟派の見解に對して、朱子はそれぞれの所爲はそれぞれの時措之宜において必然かつ至善であると反論し、誹孟派がこゝとさら賞揚する五霸の尊周も理勢之必然によってそうせざるをえなかった結果に他ならないと斷じている。殊に王朝末期の類似性から、文王の臣節を規範とする李觀に對しては、「孟子之時、有信行王道者、必有天下。其勢與文王不同。非謂文王計欲取紂而不能也」(常下9朱)

と述べ、李靚の歴史批判の缺落を「孟子之時、行王道者必有天下、其時措之不同、又不可執一而論」(同上)と指摘している。

孟子の時代的情況を「行仁義而天下歸之、乃理勢之必然、雖欲辭之而不可得也」(常上₂朱)と位置づける朱子は、孔子尊周・孟子不尊周の歴史的事實の相違を辯證する歴史批判を行っているが、その要點は左のようなものである。

周以失道浸微寢滅。孔子作春秋、雖云尊周、然貶天子、以達王事、二百四十二年之間亦屢書矣。至於顯王之時、天下不知有周室。蓋人心離、而天命改、久矣。是時有王者作、亦不待滅周而後天下字于一。(常上₅朱)

これは「孔子之時、周室雖微、天下諸侯尙知尊周爲美。故春秋之法、以尊周爲本。至孟子時、七國爭雄、而天下不知有周、然而生民塗炭。諸侯是時能行王道、則可以王矣。蓋王者天下義主也。故孟子所以勸齊之可以王者此也」(二程全書卷三十六、外書第八游氏本拾遺)という程伊川の語を踏襲したものである。更に伊川には「孔子之時、諸侯甚強大、然皆周所封建也。周之典禮、雖甚廢壞、然未泯絕也。故齊晉之霸、非挾尊王之義、則不能自立。至孟子時、則異矣。天下之大國七、非周所命者四、先王之政絕而澤竭矣。夫王者天下之義主也。民以爲王、則謂之天王天子。民不以爲王、則獨夫而已矣。二周之君、雖無大惡見絕於天下、然獨夫也。故孟子勉齊梁以王者、與孔子之所以告諸侯不同。君子之救世、時行而已矣」(二程全書卷二十三、遺書伊川先生語第七下)という言葉があり、孔子尊周・孟子不尊周の事實としての相違を歴史的情況の批判を通じて説明し、孟子勸諸侯爲天子の歴史上の意義を前向きに明らかにしている。さらに、「或謂、孔子尊周、孟子欲齊王行王政、何也。先生曰、譬如一樹有可栽培之理、則栽培之、不然須別種。

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

賢聖何之心、視天命之改與未改爾」(二程全書卷三十六、外書)という指摘から、伊川は結果論的ながらも天命の改・未改に依據して、孔孟相異なる言行を同格對等に扱っていることが分かるのである。こうした伊川の言説に朱子が依據していると見ることは十分可能であろう。朱子が「天下不知有周室。蓋人心離而天命改、久矣」と述べるのは、離婁上第九章の「桀・紂之失天下也、失其民也。失其民者、失其心也」という考えを適用したものであるが、伊川が封建制の崩壊過程に注目したのに加えて、孟子の民本主義に根ざした天命の所在を問題とし「順天者存、逆天者亡」(離婁上第七章)の歴史原理をあてていることが分かる。伊川・朱子ともに孟子の勸諸侯爲天子の言行をそのまま歴史的事實として規定するが、これは「夫天未欲平治天下也。如欲平治天下、當今之世舍我其誰也」(公孫丑下第十三章)という孟子の自負心をも裏付けとするものであろう。天子は天の命を受けて君臨し民を治めるものであり、天子がその職責を果しえなければ天はこれを廢して他に代える、天命の興廢は民心の向背によって知ることができるといふ孟子の天命思想からすれば、孟子自身の語に天命已改の前提が存在することに、伊川・朱子の觀點が七篇所載の記事に立脚したものに他ならないことは明らかである。

四 朱子の孟子辯護の特質と經・權との關連

朱子が周室に對する孔孟相違の要因として擧げる時措之宜という語は、中庸章句第二十五章に見える。朱子四十四歳の語録に「問、時措之宜是顏・稷閉戸纓冠之義否。曰、亦有此意。須是仁知具内外合、然有箇時措之宜。又云、如平康無事時是一般處置、倉卒緩急時又有一般處置」(朱子語類卷六十四、廖德明錄)とあり、朱子が孟子の「易地則皆

然」の解釋を中庸に結びつけていることが分かる。三十九歳に『程氏遺書』を編次していることから、朱子のこの語録が伊川の「時措之宜、言隨時之義。若溥博淵泉而時出之」(二程全書卷十九、遺書伊川先生語第四)を念頭にしたものであろうことは十分考えられ、禹・稷・顔子・曾子・子思の別個の所爲が固有する必然性の説明に、朱子は伊川の定義を使用していると見ることが出来る。

『讀余隱之尊孟辯』の中で朱子が説く時措之宜の概念は、中庸章句經文中の語句をそのまま使用しているというよりも、中庸を解説した伊川の語を典據としたものと見るべきで、伊川の歴史批判と「時措之宜、言隨時之義」という定義を二本の柱として、朱子の不尊周勸諸侯爲天子に關する孟子辯護の論理が構築されていると分析される。但し、伊川の場合、孔孟相違を歴史的事實として認定する發言は、主として古代封建制の崩壞という時代の趨勢と結果論的な天命の有無に依據するにとどまるが、朱子はこれに理勢之必然なる法則性を加味し、歴史の展開に人知人力を超えた客觀的原理の存在を設定して、そこから個々人の所爲所業の意義を規定するといった方法をとるのである。このような朱子の論理は、離婁下第二十九・三十一章の集注の構成を見るとより一層明らかになる。

此章言、聖賢心無不同、事則所遭或異。然處之各當其理。是乃所以爲同也。尹氏曰、當其可之謂時。前聖後聖、其心一也。故所遇皆盡善。(離婁下第二十九章、集注)

尹氏曰、或遠害或死難、其事不同者、所處之地不同也。故易地則皆能爲之。孔氏曰、古聖賢言行不同、事業亦異。而其道未始不同也。

(離婁下第三十一章、集注)

集注の原則から先儒前輩の言説を積み重ね客觀的真相を造形するとい

う限定を受けざるをえないが、「處之各當其理」の一節は隨時之義(時措之宜)と讀み換えられ、第三十一章所引の孔文仲の語は、大略朱子の周室に對する孔孟相違の主旨に沿ったものと見てよい。このような集注の構成と伊川所説の發展應用による朱子の主張とをあわせ見るならば、朱子が孔子尊周・孟子不尊周の問題を時代の趨勢という歴史的事象の次元から理・義に關わる哲學的段階へとおしあげていることが分かるのである。

余隱之の場合、孟子の不尊周は孔子に倣うものであり、勸諸侯爲天子の言行の眞意は、戰國亂世に王制あるを知らしめ、道を顯現させることにあるとするものであった。隱之は孟子の言行を「識通變之道、達時措之宜、不肯枉尺直尋」(常下8辯)と評し、湯・武を引き合いにした勸諸侯爲天子に關わる言行を通變之道としての權の一斑と見ているが、これは飽くまでも孔孟一致の大前提から基本的に周室無視(王朝顛覆)の意など孟子には存在しえないと見込んだ結果に他ならない。ところで、朱子の門人陳北溪が「權只是時措之宜」(性理字義下卷、經權)と定義していることから、朱子もまた何らかの形で權との關連によって孟子不尊周の問題に言及しているのではないかと思われる点がある。前述の北溪の定義が朱子の言説に根ざすものであることは、論語子罕篇第二十九章の集注に「可與立、未可與權」の解義として「楊氏曰、知爲己則可與共學矣。學足以明善、然後可與適道。信道篤、然後可與立。知時措之宜、然後可與權」という語をあてていることや、北溪と同時代の門人の記録した語録に時措之宜と權との表裏一體の關係を指摘したのが見えることから推察される。しかし、『讀余隱之尊孟辯』における記載の實際からすれば、朱子は孟子不尊周勸諸侯爲天子に關する限り、一貫して時措之宜を叙して權に言及せ

ず、むしろ經・權の問題とは別な觀點から論しようとする姿勢が感得される。不尊周勸諸侯爲天子についての孟子の言行は少なくとも通變の便法ではないというのが朱子の基本的考え方であらうと思われるが、これは離婁上第十七章（淳于髡曰男女授受不親章）で、孟子の口から危急存亡の時には經に反し權を行ふ必要を引き出した淳于髡が「今天下溺矣。夫子之不援、何也」ときりかへしたのに對し、孟子が「天下溺、援之以道。嫂溺、援之以手。子欲手援天下乎」と反論し、自らの理想の實現が權道などによるべきもないと斷じている點を踏んだものと考えられる。孟子の權道の主張は離婁下第十一章、萬章上第二章、盡心上第二十六章などに見えるが、大略日常的に不可欠な工夫としての權の必要を説くもので、治國平天下の問題とは規模が異なっている。従って、七篇の記述に據るならば、權の概念で勸諸侯爲天子の言行を括ることはあまり適當ではないということになるのである。朱子が孟子の言行の意義付けに權の概念の使用を避けているということは、隱之と一線を畫すことのみならず、天命の改・未改に依據して、相異なる孔孟の言行を同格對等に扱おうとする意圖による所が少なくない。この場合、假りに孟子の言行を戰國亂世のゆえの權道の一斑と規定すれば、對立概念としての經が問われ、いきおい誹孟・尊孟兩派の水掛け論の次元に立たざるをえないことになり、孟子七篇の觀照と批判の普遍性を缺く結果に陥らざるをえなくなるであらう。朱子六十八歳の語録に「經是萬世常行之道。權是不得已而用之、須是合義也。如湯放桀武王伐紂伊尹放太甲、此是權也。若日時時用之則成甚世界了」（朱子語類卷三十二、曾祖道錄）というのがあるが、「二周之君、雖無大惡見絕於天下、然獨夫也」（前出）という伊川の判斷を踏襲すれば、孟子不尊周勸諸侯爲天子の合義性は「武王伐紂」の脈絡上に位置

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

付けられてもよいことになる。しかるに、實際上は經・權に關する朱子の語録中に、孟子不尊周勸諸侯爲天子を權にあてはめた見解を見出すことはできない。伊川の歴史批判を繼承する朱子は、孟子の背負う歴史的情況を、いままさに道理が窮まり閉塞せんとする狀態としてよりも、道理が既に久しく膠着し續け道の閉塞が日常化した狀態として見ているのであって、天命は既に改まっているものの新たに命を受けた天子は未だ出現していないという空白の時代における孟子の言行を、理勢之必然に則るものとする朱子の視點からすれば、經・權の枠外に孟子を位置付け湯・武・伊尹とは別な扱いをしているのも、前述の七篇の記識以外にゆえなしとせぬ所と思われる。

朱子は孟子不尊周勸諸侯爲天子の真相究明に際し、一貫して時措之宜による説明を行っているが、宜は義であり時措之宜は隨時之義であって、それが經・權を總括する概念であるからに他ならない。隨時之義を伊川は次のように説明している。

禮孰爲大。時爲大。亦須隨時。當隨則隨、當治則治、當其時作其事、便是能隨時。隨時之義、大矣哉。尋常人言隨時、爲且和同。只是流徇耳。不可謂和。和則已是和於義、故學者之患、在不能識時時出之。亦須有溥博淵泉方能出之。（二程全書卷十六、遺書伊川先生語第二）

伊川の意見を要約すれば、隨時之義とは然るべき時に然るべきことを行うことである。これに「徇流俗非隨時、知事可正、嚴毅獨立、乃是隨時也」（同上）の語を補えば、更に隨時之義の相違による孔孟の個性が浮き彫りされ、孔子尊周・孟子不尊周の違いを嚴然たる事實として同格對等に扱い、それぞれの意義を確定する上での基盤となっていることが分かる。經・權について附言すれば、伊川は經即權の定義の

もとに、独自の「權の思想」を展開しているが、朱子は經を即權と速斷することにはやや批判的であつたと見え、次のような語録が残っている。

問、經・權不同、而程子云經即權也。曰、固是不同、經是萬世常行之道、權是不得已而用之、大槩不可用時多。又曰、權是時中、不中則無以爲權矣。(朱子語類卷三十一、林錫錄)

朱子語類卷三十二は論語の解義に關する語録を集めた部分で、右の語録は「可與共學章」に收められている。朱子の經・權に關する語録の大半はここに蒐集されているが、伊川の經即權を意識したものが多い。朱子の經・權に關する語録を見ていくと、大旨次のような語に朱子の意見を要約できる。

經畢竟是常、權畢竟是變。又問、某欲以義字言權、如何。曰、義者宜也。權固是宜、經獨不宜乎。(林莊祖錄)

經者道之常也。權者道之變也。道是箇統體貫乎經與權。(呂壽錄)
曰、義可以總括得經・權。不可將來對權。義當守經則守經、義當用權則用權。所以謂義可以總括得經・權。(林恪錄)

朱子によれば、義は經と權とを兼ねる概念であり、相對する經も權も義を具現する一形態であると考えられる。「在物爲理、處物爲義、體用之謂也」(告子上第十四章、集注)という定義よりすれば、理勢之必然と時措之宜(隨時之義)は體用關係であり、時措之宜は經・權を總括するものと言ふことかてきる。右の語録は朱子が六十歳から七十歳までの晩年のものであるから、著述年代を俄かに確定できない『讀余隱之尊孟辯』の論理展開に直截的にあてはめることには慎重を要するが、少なくとも朱子は、經・權を超えた所の義(理)の問題として孟子不尊周勸諸侯爲天子を取り扱っていることだけは確實であらう。

五 附 言

朱子は朋輩の張南軒に宛てた書面に「愚意、孟子一書最切於今日之用」(朱子文集卷二十五、答張敬夫書四)と識している。ここで言う今日之用とは、老・釋の形而上的思辯に壓されがちな正統思想の危機を念頭にしたものである。物心兩面における正統思想の復權こそは洛閩學派相傳の道であり、四子書(四書)制定の根本的要因であつたことは言うまでもない。經書としての七篇の意義を開鑿するにあたって、朱子は『孟子序說』を構成しているが、そこに引く先儒前輩の孟子説は道統・異端辨正・性善・養氣の四つの柱立てによつていふことが分かる。殊に性善・養氣に關しては、朱子自ら滕文公上の首章の集注に「愚按、孟子之言性善、始見於此。而詳具於告子之篇。然默識而旁通之、則七篇中無非此理。其所以擴前聖之未發、而有功於聖人之門」と述べ七篇貫通の第一主題として性善を規定し、公孫丑上第二章の養氣知言說に對して「程子曰、孟子此章、擴前聖所未發。學者所宜潛心而玩索也」といった高い評價を與えており、『孟子序說』の構成とあいまって、朱子か仁義・王道の提唱以上に、獨立した經書としての七篇の意義をここに求めていることが分かる。朱子語類卷一〇四には「某十數歲讀孟子言聖人與我同類者、喜不可言。以爲聖人亦易做、今方覺得難」(包揚錄)という述懐が見え、朱子か早くから七篇中の内面的な問題に注目していたことが跡づけられる。また、朱子語類卷十九の讀語孟綱領には「孟子教人多言理義大體、孔子則就切實做工夫處教人」(程端蒙錄)など經書としての論・孟に期する所の相違を述べた語が收録されており、朱子か單に孟子七篇の書を論語の疏として把握してゐたのではないことは明らかである。

趙岐の『孟子題辭』によれば、漢の文帝の時に孟子の書が論語・孝經・爾雅とともに經に位置づけられ、博士が置かれたという。しかしその後は、五經に準ずるものとして別格に扱われてきた論語の陰にかくれ、孟子七篇が諸子の屬に埋もれきたことは紛れもない事實である。孟子七篇の諸子への降格のいきさつは様々に推測されるが、少なくとも七篇は論語の疏なるがゆえに價值があるという老え方は、中國思想獨特の尙古主義の中で、同一義の經典は複數を必要としないという結果に歸着するであろうことは想像に難くない。朱子が經書としての七篇の意義づけにおいて仁義・王道について豫想外に執着していないことと恐らく無關係ではあるまい。『讀余隱之尊孟辯』における朱子の孟子不尊周への對應を見ていくと、經書としての孟子七篇の意義づけの背景が感得される。朱子が隱之同様に孔子の遺意としての仁義・王道に飽くまでも執着するならば、四書の一つとしての七篇の獨立的意義がかすみ、孔子との比較による誹孟の餘地を残すことになる。孔子尊周・孟子不尊周の相違を經・權によらず措之宜によって説明し、名分論という經のレベルの議論を超えているのも、經書としての孟子七篇の獨自性の闡明とかわりないことではあるまい。因みに、朱子以前の尊孟・刺孟の論争が經綸・正名兩派の朋黨間の角逐を反映したものであるという觀點によれば、朱子の孟子不尊周への對應は、存禮・廢禮の議論や舊法・新法の政争という形而下的な生臭い場面から脱脚し、哲學的レベルで一定の結論を示したものであることになるが、人知人力を超えた宇宙の主宰を想定し森羅萬象の由り來たる根本原理を重視するということは、孟子にも劣らない朱子の眞面目であつて、壬午應詔封事・戊申封事などに見える實際的政治方面の朱子の理念のうちに明確に打ち出されていることを考えれば、單に朋黨間の争

『讀余隱之尊孟辯』に見える朱子の孟子不尊周への對應

いを純粹學問の領域に引き上げ昇華させたものとのみ規定することはできない。朱子の政治思想では、天子は必ずしも唯一至上の絕對者とは限らない要素を有しているが、『讀余隱之尊孟辯』における孟子不尊周への朱子の對應は、前述した經書としての七篇の意義の開鑿の他に朱子自身の政治理念を反映したものと見ることもできるのである。

注(1)

『尊孟辯』の書誌學的な問題は市川安司博士の『朱子文集に見える李觀の常語について』(東京支那學報第一號)に詳らかつてある。余隱之について朱彝尊の『經義考』は晁説之の『晁孟』と沈括の『孟子解』との間に『尊孟辯』を録し北宋時代の學者と見ているが、『四庫全書總目提要』は朱子と同時代人として考證している。『讀余隱之尊孟辯』の全體的印象から南宋の人物のように見うけるが俄に斷ずる資料に乏しい。少なくとも、『辯』に引用する論・孟の解釋からは二程の門流に屬するよりは漢・唐の訓詁學の系統に屬する人物と思われる。

(2) 司馬光は各論的に孔子之道と孟子の言行との矛盾を指摘するが、李觀はむしろ總論的に孟子不尊周を扱い、孔孟之道という概念自體を否定する所に力點を置いている。また鄭厚の場合は一貫して孟軻と呼び捨てにし、叙述の上でも一介の辯士として扱うよう配慮しているが、誹孟を急ぐあまりに論理の展開が稚拙かつ教條的である。

(3) (孟子) 固知有周室矣。天之所廢、必若桀・紂。周室其爲桀・紂乎。盛之有衰、若循環然。聖王之後、不能無昏亂、尙賴臣子扶救之爾。天下之地、方百里者有幾、家家可以行仁義、人人可以湯・武、則六尺之孤、可託者誰乎。孟子自以爲好仁、吾知其不仁甚矣。(常下8)

(4) (孟軻之時) 周德之不競、亦已甚矣。然其虛位、猶拱而存也。使當時有能唱威文之舉、則文・武・成・康之業、庸可庶幾乎。(折衷2)

(5) 諸橋轍次著『儒學の目的と宋儒—慶曆至慶元百六十年間—の活動』第三編第一章第二節參照

- (6) 誹孟派の孔孟相反に對する余隱之の孔孟一致の主張は「孔子之於魯・衛、始接之以禮則仕、及不見悅於其君則去。豈可謂不爲禮貌而仕歟。爲魯司寇不用、從而祭燔肉不至、不稅冕而行。豈可謂不爲飲食而仕歟」(疑下3辯)と論ずるに及んで、ともすれば牽強附會の感を拭いえない。これに對して朱子は、七篇中の孔子に關する記事文を證左に用いることの偏りを難じ、司馬光の批判には萬章下第四章の君子の進退に關する孟子の見解に對する十分な理解が足らないと評している。
- (7) 道之在天下、有正有變。堯・舜之讓、湯・武之伐、皆變也。君有大過、責成之卿反覆諫而不聽、則易其位、此乃宗廟社稷、計有所不得已也。此孟子之言、亦夫得春秋之道意歟。(疑下3辯)
- (8) 苛惟說諸侯使之尊周、諸侯不得自肆、而疆者必生變。則是速其滅周也。先見之幾、豈陋儒所能知哉。(常上6辯)
- (9) 乎、疑詞。其不爲東周也、明矣。公山弗擾召孔子、孔子欲往、遂言如用我不爲東周、則說之以西周之王道也、必矣。又、嘗有其或繼周者之語、孔子豈能必其周之祚不移乎。(折衷2辯)
- (10) 朱子の場合、「如其仁」を李觀と同じく孔子が管仲を賞した語として訓むが、桓公・管仲評價に關する論・孟間のずれについては「夫子言如其仁者、以當時王者不作、中國衰夷狄橫。諸侯之功未有如管仲者、故許其有仁者之功。亦彼善於此而已」(常上3朱)と述べ、孔子の語は飽くまで相對比較の上のこととしている。
- (11) 司馬光は「夫以紂之過大、而三子之賢、猶且不敢易位也。況過不及紂、而賢不及三子者乎」(疑下2)として孟子の責成之卿に關する意見に反對している。微子・箕子・比干の三賢を孔子が「三仁」と稱しているのは全稱肯定であり、三賢の紂に對する所業こそ孔子のは認する所だというのが司馬光の主張であるが、隱之は「孔子稱之曰商有三仁焉。以仁許之者、疑於大義猶有所闕也」と反論し、殷の滅亡に際して三子が商祚之絶を如何ともしえなかった點を指摘している。隱之の主張は、孔

- 子は仁を以て稱しているが義については言及していない、これは三賢が義に關して不充分であつたからだといふもので、孟子の仁義をそのままあてた無理な説明をしている。この點について朱子は「隱之云三仁於大義有闕、此恐未然」と批判的である。
- (12) 孟子說列國之君、使之行王政者、欲其去暴虐行仁義而救民於水火耳。行仁義而得天下、雖伊尹・太公・孔子說其君、亦不過此。(常上2辯)
- (13) 孟子說梁惠・齊宣・梁襄・滕文、使之爲湯・武行仁義、其心在於救民爾。未嘗說之以富國彊兵用征伐而取天下也。(折衷2辯)
- 孟子於列國、說之以行仁政者、不過言治岐之事而已。說之使爲湯・武者、不過以德行仁而已。說之以行王道者、不過乎使民養生喪死無憾而已。未嘗說之使伐某國誅某人、開疆拓土大統天下而爲王也。孟子者眞聖人之徒歟。識通變之道、達時措之宜、不肯枉尺直尋。(常下8辯)
- (14) 孔子作春秋、寓一王之法、正天下之名分、使亂臣賊子知所懼。孟子以王者仁義之道說諸侯、使之知有君臣父子、而杜僭竊篡弑之禍、正得夫春秋之旨。(常上6辯)
- (15) 齊桓不得不尊周、亦迫大義不得不然。夫子筆之於經、以明君臣之義於萬世、非專爲美桓公也。(常上7朱)
- また、管仲は桓公を天子にまでなしえなかったから小器であるとする隱之の評價には「隱之以爲小其不能相桓公以王於天下、恐未然。齊桓之時、周德雖衰天命未改、革命之事、未可爲也」(常上3朱)と述べ、理勢之必然と天命の改・未改の問題として考へるべき旨を説いている。
- (16) 誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始、不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合外內之道也。故時措之宜也。(中庸章句第二十五章經文)
- 仁者體之存、知者用之發。是皆吾性之固有、而無內外之殊。既得於己、則見於事者、以時措之、而皆得其宜也。(同右、朱子注)
- (17) 權處是道理上面更有一重道理。這裏須斟酌時宜、便知箇緩急深淺始

得。(朱子語類卷三十二、徐寓錄)

權者乃是到這地頭道理合當恁地做、故雖異於經、而實亦經也。且如冬月便合着綿向火、此是經。忽然一日燠則亦須使扇當風坐、此便是權。(同右、黃義剛錄)

前者は朱子六十一歳、後者は六十四歳の語録である。なお、陳北溪は朱子六十一歳、七十歳の時に直接教えを受けている。

- (14) 疑孟上第六章と疑孟下第一章は告子との論争を扱い性有三品の立場から孟子の性善説を批判するもので、隠之はこれに性善・氣質爲不善の論を立てて對抗している。それに對して、朱子の論評は「此二章、熹未甚曉、恐隱之之辨亦有未明處」というに止まり、朱子自身の心性説を述べていない。これは積極的に自説を述べる他の議論と趣を異にしていると見てよい。また、全體的印象として、批判對象となつてゐる主要章句について孟子集注と孟子精義・孟子或問との懸隔を見ていくと、『讀余隱之尊孟辯』に示された朱子の見解はより後者に近い傾向を有してゐると思はれることなどから、私は個人的かつ直観的な感想の範圍内で『讀余隱之尊孟辯』は朱子の四十歳前後の著述ではないかと考へてゐる。

(19) 注(5)参照